冨來先生の御逝去を悼む

古藤田　太

冨來先生から、時折「珍しい内容」の印刷物や小本を送って戴くことがあったので、お返しのため大分合同新聞〝灯〟に投稿八ヶ年分程を出版した小型本を御送り申し上げた。先生が御読み下さって、内容の乏しさにお笑いになっているだろうと思っていたら、奥様から主人は去る三月五日亡くなったというお電話に全く驚き、受話器を持ちながら先生のあの端正な紳士ぶりが彷彿と目に浮かんで来た。一度は先生をお訪ねしたいと考えていた矢先であった。

先生は病弱らしいとは思っていたが、奥様にお聞きすると、肋骨六本を手術によってとっている身体、日光に晒した布団さえその夜は使えない程微妙な気配りが必要なおからだと承って、食事万端先生の看護は大変だったことだろうとお推察申し上げる。何時ぞや、ささやかな物をお送り申し上げた際、庭のサザンカの小枝を副えておいたら、大層喜ばれ、土にさしたが大丈夫かも知れないと言っておられた。心やさしいお人であったと思われた。

私が想起することは昭和末年頃、荷揚町の県立図書館で毎年行われた古文書読解講習会で、冨來先生が一回講師であった。明快なお説明であったこと、その上黒板に書かれる文字の素晴らしさに見惚れたことを思い出す。これが冨來先生を知った最初であった。先生の「冨來」という姓から、中世国東の水軍で名高い氏族の出であろうか、何時かお尋ねしたいと平素考えていた。

冨來先生は常に生命の不安におびえつつ、社会活動を制限されながらも摂生に努められ、別府史等に多くの著作もなされ、天寿を完うされたことは素晴らしいことと思われる。

先生と私とはほんの行きずりのような御縁でありながら、先生の死に大きな衝撃を受けた。先生の安らかなご昇天を願ってやまない。